

「起きて、床を担ぎなさい：歩き出す信仰」

ヨハネによる福音書 5章1～9節 a

十人十色^{じゅうにんといろ}と言い、人様々、人それぞれと言います。人間の面白さを物語る言葉と言えるでしょう。実際、私たちの周囲に目をやると、実にいろいろな人たちがいることに気づかされます。おっとりした人がいるかと思えば、テキパキと機敏な人もいます。何事にも和を重んじる人がいるかと思えば、血気盛んな人もいます。調子のいい人がいるかと思えば、愚直なほどに一本気^{いっぽんぎ}な人もいます。見た目は丁寧で、礼儀は正しい。が、本当のところは高慢な、いわゆる慇懃無礼^{いんぎんぶれい}な人もいれば、齒^{きぬ}に衣着せぬ荒っぽさで、一見 とつつきにくい。けれども、その裏に熱い情^たを湛えた人もいます。さらには、優しく温かな人もいれば、冷ややかな人もいる、といったぐあいです。人間の豊かさであり、また貧しさ、煩わしさでもあるのでしょうか。皆さんはどのように思われるのでしょうか。

とはいえ、視点を変えれば、これらはどれも私たちの周囲に見られるだけではなく、実は 程度の差こそあれ、私たち一人ひとりの内にも、すなわちこの自分自身の内にもどこかに何らかのかたちで潜んでいるものなのではないか。そう思われます。だとしたら、そのどれ一つとして、軽く扱うことはできない。好い加減^{い かげん}にやり過ぎすることはできない、と思われもします。とりわけ、日ごとの歩みのなかで一歩前に進もうとするとき、他人事^{ひとごと}としてでなく、自身のこととしてそれらに向き合うことが大切になる。それらをきちんと見据えることが大事になるように思われます。そのうえで、信仰にあつて清々^{すがすが}しく元気に歩を進めることができたなら、それはどんなにか素晴らしいことか、と思われています。

私にとって 聖書を読む面白さとは、一つには、そこに描^{えが}かれている様々な人間模様を読み解く面白さでもあります。聖書に向かうと、文字どおり、色とりどりの人間の有り様^{あさま}がそこに滲^{にじ}み出ているのを目にさせられます。そして、それらが他人の姿であると同時に、しかしまた、この自分の姿でもあることに気づかされます。しかも、ある一人の他人だけでなく、あの他人もこの他人も、いろんな他人が何らかのかたちで自分の中にも生きていることを見るのです。そして、内に息づく それらの他人と向き合わされます。私にとって 聖書を読むということは、一つには、そういうことにほかなりません。

聖書はこうして、様々な人間模様^{えが だ}を描き出します。それらはまずもって、豊かないのちへと、この私たちを導くものと言えるでしょう。けれども、そこではまた同時に、私たち人間の貧^あしさが露^{あら}わにされていくのも事実です。それらを本当の知恵で見極め、良きもの^{つちか}を培^{つちか}っていくこと。聖書の御言葉^{みことば}に聴きながら、それらを交わりの中で上から頂いていくこと。それが、聖書に向かう私たちに期待されていることではないでしょうか。

今月の登場人物は 残念ながら、真似てはならない、そちらのほうの人物です。自らの貧しさを露呈してしまったほうの人物です。それは、何かにつけてブツブツ愚痴る人であり、ネチネチ 呟いてしまう自分です。とはいうものの、それはそれでまた それなりに安定してもいて、それを崩し、リスクを冒してまで良いものを求めようとはしない。今回 主イエスが語りかけるのは、そうした人間の有りように対してのよう思われます。そこには たしかに、社会的な背景や環境、境遇の問題も存在することでしょう。ですが、ここでの焦点はまずもって、それらに先立つ 事の当事者の心の有りようにあるように考えられます。そうしたところから いったい、何が生まれるだろう？ 何が始まるだろう？ そのところに留まっていて いったい、何が見えてくるだろうか、と。つまりは、すべての出発点である心が愚痴の中に住み着いてしまっているような、そして 本当のところは、そこから出ようとはしていないような、そんな心の有りようです。そのようなあり方を、実は変えようとはしていない。問われているのは、私たち人間のそうした心の様であり、そうした生きる姿勢のように思われてなりません。私たちはそれぞれの居場所で、「それでいったい、何をどうしようと思っているのか。何をどうしてほしいと願っているのか」と、そう問いかけられているのではないのでしょうか。

今回 ヨハネ福音書が描く「ベトザタの池の病人」は、人のこうした現実からの救いと、しかしそこに留まりえない人間のいつそう深い闇の姿とを鮮やかに映し出しています。物語自体は 18 節まで続きますが、今月は 9 節の前半までを扱い、9 節後半以降は次回に譲ることにします。

場面は、前々回 (2021 年 10 月) のサマリア地方の後、前回 (同 12 月) のガリラヤ地方での出来事を挟んで、ユダヤ地方のエルサレムに移ります (聖書地図「6. 新約時代のパレスチナ」参照)。ヨハネによる福音書は、「ユダヤ人の祭りがあったので、イエスはエルサレムに上られた」と、今月の 5 章 1 節で記しています。当時、エルサレムの周辺 約 35 キロ以内に住むユダヤ人の成人男性は皆、エルサレムの神殿で催される 3 つの祭りに出席することが義務づけられていました。一つは「過越祭」と呼ばれるもので、神がエジプトからの脱出を導いてくださったことを記念する祭りです。二つ目は「五旬祭」と言われるもので、モーセが神から十戒を賜ったことを記念する祭り。そして あと一つは、「仮庵祭」という、エジプト脱出後の荒れ野の旅を神が守ってくださったことを記念する祭りでした。ただし、ヨハネ福音書は、当の祭りがどの祭りであったかは記していません。また、イエス・キリスト御自身も、祭りだからといって、他の人々のように 神殿に入り浸ってはおられません。祭りの最中にもかかわらず、別の場所におられます。おそらくは、神殿に出向き、なすべきことを済ませて、そして そこを後にされたのでしょう。主イエスは 今、病に苦しむ人たちや体の不自由な人たちと共におられます。そして、そこで静かに、癒やしと慰めの御業をなさそうとしておられます。祭りの騒がしさを離れ、祭りの外に置かれている人々のところに赴かれる。それは、祭りが形ばかりになって 本当に救いを必要としている者たちから遠いものになってしまった、当時のそうした神殿礼拝のあり方を暗示しているのかもしれない。人生の悲しみに涙し、人の

世の冷たさに身を屈めて 日を過ごしている人たちが、ここにいる。人生の矛盾にどうする術もなく、世の中の片隅で、その吹き溜まりでただただ奇跡を待って生きている人たちが、ここにいる。救いを必死に求めている人々が、ここにいる。イエス・キリストは いつもそうであられるように、今もまた、救いを求める そのところに行かれ、真のいのちを求めている そのところに赴かれたのではないのでしょうか。主イエスの思いはいつも、そうしたところにこそあるように思います。

そこは、「エルサレム」の「羊の門の傍らに」ある池で、「ヘブライ語で『ベトザタ』と呼ばれる池」だったと、福音書は 2 節で記しています。池は、19 世紀の終わりにエルサレムの神殿跡が発掘されたとき、神殿から少し離れた北側で発見されました。聖アンナという修道院の構内で見つかったため、現在は「聖アンナの池」と呼ばれています。台形のような形の、少し大きさの違う池を 2 つ 思い描いてください。そして、上に小さなほうが、下に大きなほうがくるようにして、それらを上下に重ね合わせます。南北に二つの池が合わさった双子の池が出来上がったかと思えます。二つを合わせると、全体で 横が 60 メートル余り、縦が 100 メートルほどにもなる、ちょっとした遊水地のような池です。「〔その周りには〕 病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢 横たわっていた」と 3 節に記されていますが、そこには 病める人たちや苦しめる人たちがチラホラでなく、文字どおり大勢 群がっていた。池は、そうした人々が群れをなして横たわれるほど、それほどに大きなものでした。そして、その周囲を全体として「回廊」が囲んでいます。上下左右で、4 つの回廊になります。そして もう一つ、二つの池の境目にも回廊があります。これで回廊は、合計 5 つになります。2 節の終わりに「そこには五つの回廊があった」とありますが、全体の構造はこんなぐあいになっていました。さらに、回廊には、雨露をしのげるように それなりの建築物があったと言われています。この池の周りに、すなわち、この池を取り囲む回廊の上に 人々が群れをなして横たわっていたのでした。少なからぬ人が何カ月も何年もそこに身を横たえ、そこに住み着いていたにちがいません。ベトザタの池とは、そんな人間の悲哀と苦悩の象徴のようなところでした。

実は、池の名前の「ベトザタ」については、邦訳でも英訳でも「ベテスタ」としている聖書も少なくありません。日本語の訳で言えば、私たちが現在使っている『新共同訳聖書』の前の 2 つの聖書、『文語訳聖書』と『口語訳聖書』はいずれも そうでした。英訳の聖書では、*The New King James Version* や *The Revised English Bible* などが同様です。それは、福音書の元々の、いわゆるオリジナルの原稿が今では失われていることから来ています。当時は当然ながら 印刷機などありませんから、文書を受け継いだり広めたりするとき、初めに書かれたものを手書きで写して そうせねばなりませんでした。そのようにして出来た書き写しの分を「写された本」と書いて「写本」と呼びますが、となれば、そこには避けがたいこととして 当然、写し間違いが起こってきます。「ベトザタ」か「ベテスタ」という問題も、こうしたことに起因していると考えられています。綴りも発音も似ているので、なおさらです。説明はそれくらいとして、ここで申し上げたいのは、池の名前が前の訳の「ベテスタ」だったとしたら、そこには 私たち人間のなんとも皮肉な現実

が象徴されているということです。新共同訳聖書が採用している「ベトザタ (Βηθζαθά<Βηθζαθά, ἦ)」という名前は「オリーブの家」という意味ですが、これに対して「ベテスタ (Βηθεσδὰ<Βηθεσδὰ, ἦ)」は「慈しみの家」という意味で、オリーブにも増して美しい 実に深い意味を秘めた名前となっています。どうして、慈しみの家なのか。病んでいる者、苦しんでいる者、打ち拉がれている者の救いの場所だからです。しかし、慈しみの家であり救いの場所であるはずの そのところが、人間の否定しがたい裸の姿を露わにして見せつけるところとなっている。ネーミングの美しさとは裏腹に、人の醜い有り様が露わになるところとなっている。そこに、私たち人間の 悲しくも皮肉な現実を見せつけられる思いがするのです。

それはつまり、こういうことです。池の周りには、「病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢 横たわって」(3a) ました。なぜかという、^{おおぜい}「彼らは、水が動くのを待っていた。それは、主の使いがときどき 池に降りて来て、水が動くことがあり、水が動いたとき、真っ先に水に入る者は、どんな病気にかかっているも、いやされたからである」(3b~4) と、ヨハネはそう説明を加えています。これは、私たちの使っている新共同訳聖書では本文の外、福音書の最後の頁の欄外に記されています。212 頁の最後ですが、これも、写本によって 記されているものと抜けているものがあるため、厳密を期してそうしたものです。いずれにせよ、苦しみや悲しみからなんとか自由になりたいと、皆そう願って、必死な思いでそこに群がっていたことでしょう。

池の「水が動く」ことについては 幾つか、説明がなされています。例えば、池の底から^{かんけつせん}間欠泉のように水が湧いていて、それが時折、池の表面を動かした。あるいは、池の底に地下水の水流があつて、それが時に、池の水を泡立てた。また、池は北のほうが少し高く、これを利用して、二つの池の水位を調節する水道が^う埋められていた。そして、この水道で 北の池から南の池に水を導くとき、その水の動きによって 池の表面が波立った。さらには、水位を維持するため、外部から水を引く水道が埋設されており、それで水を引き込む際に 池の表面に^{きざなみ}細波が立った。発掘跡の様子などから、こうした可能性が推測されています。兎にも^と角にも、人々は何らかの理由で、池の水が動くのを必死に待っていたのでした。

人々は水際に^{みずぎわ}一番近い所から 順に場所を取って、^{かいろう}回廊を埋めていました。誰もが池の表面に目を凝らし、油断なく見張っています。池の水が動いた瞬間に、誰よりも先に、他人をすべて出し抜いて飛び込まなければならないからです。見張りに^{つか}疲れて 東の間の休息を取る間も、目だけはそれでも、池の方に向けられています。ところが、一人、他の人たちと少々違っている人間がいます。他の者たちほど、必死な様子が見て取れません。池の水を見る目も、見張っているというより、どこかボーッと眺めている風です。かなりの年齢のようです。よく見ると、その目は冷たく^{よど}澱んでいる。憎しみと怒りとに満ちています。そして、絶望とも違った、なんとも投げやりな色を^{にじ}滲ませています。それは、池の周りに横たわっている者たちのうち、誰よりも長く、誰よりも^{みじ}惨めな人生をおくってき

た男でした。8 節から察するに、この男は、足が不自由で動けなかったとみられます。彼は 38 年間も、そこに横たわっていました。

男は、何度となく、温かい言葉をかけられたことでしょう。「池の水が動いたら、助けて入れてあげましょう」と、男を可哀^{かわい}そうに思った隣人から、親切な言葉を一度ならずかけられたにちがいありません。彼も、それを頼みにしていました。が、いざ水が動くとき、助けてくれると言った隣人も結局は、男のことなどは忘れ、我先にと先を争って飛び込んでいきます。こうして、男は繰り返し裏切られ、信じるものを失って、不信と恨みと投げやりの中に身を置くようになったのではないかと。男は、誰よりも救いを必要としていました。しかし、誰よりも、救いから遠いところに置かれていました。「いざとなりゃあ、みんな、自分のことしか考えやしない。他人を裏切っても、口から出るのはい言訳や口実ばかり。ここが『慈しみの家』^{いえ}だなんて、とんでもない。ナンセンスで、ふざけてやがる。誰よりも慈しみを必要としている この俺が、それを決して貰^{もら}うことのできないところ。ここは、そんな場所なんだ。力のない奴は置き去りにされて、力のある者だけが飛び込んでいく。慈しみなんぞ、糞食^{くそ}らえだ」。そんなやり場のない思いが冷たさや憎しみ、怒りの色となって、男の目を澱^{よど}んだものにしていたのではないのでしょうか。そして、投げやりの世界に、男を陥^{おとし}れていたように思われます。

慈しみの家^{いえ}が、憐れみ^{あわれ}の欠片^{かけら}もない、人を蹴落^{けお}とすところとなっている。なんと皮肉なことでしょうか。ですが、理不尽を憤る男の言葉はひよっとすると、当たらずとも遠からずなのかもしれません。私たちの世界もまた、飛び交う言葉は必ずしも冷たいものではありません。むしろ、耳に心地よく響く美しい言葉が交わされているのではないのでしょうか。それがでも、時に言葉の美しさとは裏腹に、いや時として言葉の美しさを隠^{かく}れ蓑^{みの}にして、美しくない醜^{ずる}いもの、狡^{すく}いものが幅を利かせているというようなことはないか。ベトザタの池の住人たちほどではないにしても、私たちの日常にも同じような影が差していないとも言い切れないのではないかと。そうも思われます。だとしたら、それはなんとも貧しく悲しいものですが、しかしまた、斜^{はす}に構えてそれをただ愚痴^{うぢ}るだけでは、そこからは何も生まれないようにも思われます。事実、池の男の投げやりは、彼をいつそう、救いから遠いところに追いやっていました。

池に赴かれた主イエスが目を留^とめられたのは、そんな姿のこの男にでした。この男にこそ、人の世に生きる悲しみややりきれなさが他の誰よりも深く疼^{うず}いていたからでしょう。主イエスはそんな男を目にされて、何もせずにはおれなかった。イエス・キリストはここでもまた、御自分のほうから男に声をかけられます。6 節、「良くなりたいか」。たしかに、これは取りようによっては、愚かな問いと言えなくもありません。38 年もの間、床^{とこ}に臥^ふしている人間です。治りたいに決まってる！ そう思うからです。ところが、そうそう単純でないのが私たち人間でもあるようです。男は、主イエスに答えて言います。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです」(7)。「治りたいのか」と聞かれたのに、治りたいとも治りたくないとも言わず、いかに

もピント外れな答えをしています。治りたい、今すぐにでも治りたい、とそう必死に願っているのなら、「そうです、治りたいんです。助けてください。癒やしてください」と言ったらいいのに、が、男の口を突いて出たのは他人に対する文句でした。男ははたして、心から治りたいと願っていたのでしょうか。口では 普段から、治りたいと言っていたことでしょう。けれども、本音のところ、心底 立って歩きたいと願っていたのだろうか。そう思わせられます。

「人間とは、言葉で真実に化粧をする動物である」と、そう言った人がいます。ドキッとさせられる言葉ではないでしょうか。でも、どうも当たっているようにも思われます。化粧で誤魔化すようにして、言葉を巧みに使い、真実を隠す。本音を取り繕う。人のそうした狡猾さを皮肉ったものですが、ベトザタの池の病人も、その「治りたい」との言葉に どれだけの真実がこもっていたのでしょうか？ もしかすると、38年という長い時が男を、それなりの安定へと住まわせてしまったのかもしれませんが。ブツブツ文句を言いながらも、それなりに食べてはいける。汗水流して働かなくても、それなりに食べられる。不満の中のそれなりの安定とでも言えるのでしょうか。実際、足が治って歩けるようになったら、今度は自分で食い扶持を稼がなくてはなりません。自分で汗を流さねばならなくなる。足が不自由なままでいれば、たしかに、やりたいことをあれもこれもと自由にはできない。けれども、その代わり、人の善意に頼っていられます。物乞いしかできないものの、でも、物乞いなりの安定は保証されるということでしょう。このように、男にとって「歩く」ということは 文字どおり、それまでの自分を後ろにやり、新しい自分に踏み出すことを意味していました。そこには、それまで知ることのなかった開かれた人生が待ち受けています。が同時に、ひとたび そこに踏み出したら、それなりの安定を後ろにやることにもなる。男はその板挟みに揺れたのではないのでしょうか。男が本心 欲しかったのは、はたしてどちらだったのでしょうか？ そして、この私たちが本音で求めているのはどちらなのでしょう。

教会にいと、いろんな人がやってきます。暴力団紛いの男性がお金をせびりにきて、それになかなか応じないと、ついには恫喝もどきの捨て台詞を吐いて帰っていったこともありました。性格的にはそれと逆と言えるのでしょうか。以前いた教会に、一人の青年が訪ねてきました。20代後半の男性でした。汚れたジーンズにスニーカーという出で立ちで、お世辞にも小奇麗とは言えません。会堂の入り口から牧師室に案内して、話を聞きました。すると、「お金も食べる物もないので、助けてくれないでしょうか」と言います。何も聞かずに「はい、どうぞ」と言うわけにもいきません。事情を詳しく聞きました。すると、「・・・に実家があるんですけど、働いてないんで、行く先々で貰い物をして、・・・と・・・の間を歩いて、行ったり来たりしています」と、信じられないようなことを言います。そうこう話しをしましたが、埒が明きません。そこで、「仕事がないんじゃ 大変だろうから、市役所の福祉課と一緒に行って、相談に乗ってもらおうよ」と持ちかけました。ところが、これにも乗り気ではありません。そんなふうにして、最後に「でも、そんな生活、いつまでも続けられないよね」と言ったのに対し、その彼が答えたのは次のような言葉でした。曰く、「でも、できたらいいなと思ってるんですけど

ど・・・」。いくらのお金と食べ物を渡して別れましたが、実際の話です。

少しばかり極端な例になりましたが、もう少し身近なものとしては、こんなやり取りを見かけたこともあります。病院でのことです。看護師さんが、入院の患者さんに話しかけていました。「もう2週間ね。そろそろお家に帰りたくなっただんじゃない?」。すると、こんな返事が返ってきたのでした。「そうねえ。でも、家に帰ってもねえ。ここのほうがいいかなあ」。家に帰ってもゴタゴタあるし、何かと気もつかうから、というのでしょうか。病院は退屈だけど、それでもそこそこ平和だし、三食と昼寝も付いてるし、というような。それぞれにいろんな事情や背景があるのは間違いありません。しかし、どこかそんなふう聞こえたのも事実です。60過ぎの女性の患者さんでした。

このような例は、言ってみれば たしかに、私たちの日常から少々離れたところでの出来事で、一見 極端にも見える出来事です。考えてみれば、そもそも これまで御一緒に見てきた今回の「ベトザタの池の病人」のそれもまた 同じように、私たちの毎日とは少なからず距離があるように感じられます。しかし、だからといって、なら どれも私たちと縁のない 関係のないことかということ、はたしてどうでしょうか。必ずしもそうも言い切れないように思われます。実際、「物事は、極端な私たちを通して、その隠れた見えない面を露わにする」とも言われます。見た目には日常から遠いように感じられる そうした出来事を通して、内に隠れて見えない 人間の本質的な事柄が明らかになる、と言うのです。自らの内にも、多少なりとも似たような自分がいはいはしないか。自身の現状に不満を抱き、愚痴を抱えながらも、がしかし、できたら ちょっとでも楽をして、それでそこそこうまくやれたらいいんだけど、といった そんな心持ちです。実際、この私の中にも全くないとは言いきれません。ですので、あの時の青年とのやり取りや入院患者さんの返答を想起すたびに、私は自分自身の心の内を垣間見る思いにさせられます。心の底では、どこかそれなりのところに安んじて安住している、そんな自分です。聖書を読むというのは、一つにはそのようにして、個々の出来事の中に 誰の内にもある、したがってこの私の内にもある人間としての本質を読み取ること、感じ取ることなのではないか。私は、そんなふう思われています。

同様な思いで聖書に向かっている人たちも少なくないようで、聖書学者をはじめ、多くの人たちが次のように述べているのを目にもします。「イエス・キリストの助けを頂くには、まずもってそれを願わねばなるまい。主イエスは私たちのもとに来られて、こう言われる。『あなたは本当に変わりたいのか』。もし、今のままでいたいという思いがその心にあるとしたら、『新しくしてください』とどうして言えるだろうか。良きものを切望する思いがなければならない」。主イエスは御自身に信頼する者を豊かなのちで育んでくださる。それは間違いのないのだが、しかし そのためには、それまでの自分を後ろにやって、新たな一步を踏み出さねばなるまいと言うわけです。

イエス・キリストは こうして、池の男に問われました。「良くなりたいたい〔の〕か」。そして、

そう問われた男がこれに答えて言います。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです」。なんともピント外れな返答です。治りたいとの思いが、本人に本当にあるのか。どこまで その気があるのか。いかにも疑わしい返答ではないでしょうか。これじゃあ この話もこれでおしまいかな、と思ってもおかしくないところです。けれども、男の話はそれで終わりになってはいません。幕になってもおかしくないのに、それでもなお続いている。主イエスの関わりはそれで終わってはいないのです。それどころか、男のそんな返答にもかかわらず、その本音を蹴散らすかのようにして、イエス・キリストはひと言、こうおっしゃられる。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」(8)。いったい、主イエスの何がそうさせたのでしょうか？ そこにあるのはいったい、主イエスの何なのか。そう思われてなりません。そして、そのことに思いを致すとき、今月の聖書の中心は、これまで見てきた病の男のあれこれ以上に、それらを超え凌いで 実は、主イエスのその心にこそあるように思われるのです。

そこには、男の悲しみに心を深く合わせられた主イエスの思いがまず、ありました。それが、主イエスを男のもとに赴かせた。が、その慈しみはまた、ただそれだけで終わるものでもありませんでした。男のどっちつかずの煮え切らない内心にもかかわらず、それを文字どおり 蹴散らすかのようにして、主イエスは男におっしゃられた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」。そう告げられたのでした。私は、ここに 私たちの救いがある。主イエスのこの心とその関わりにこそ、私たちの本当の救いがあるように思われています。すなわち、男の足りなさをものともせず、御自身の思いを通される、そのイエス・キリスト。そのようにして、この私たちの不足をものともせず、御自身の熱い思いを成し遂げてくださる主イエス、そのお方のお姿です。ここにこそ、本当の希望があるのではないか。本当の救いがあるのではないか、と そう思われています。なぜなら、人は誰しも、そしていつの時も、^{みずか}自らの至らなさを負って生きているからです。

主イエスはそのようにして、「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と 男に告げられました。「すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした」と、聖書は9節で述べています。「起き上がりなさい (^{エグイレ} ^{エグイロー} $\epsilon\gamma\epsilon\iota\rho\epsilon < \epsilon\gamma\epsilon\iota\rho\omega$)」。それは、「立ち上がりなさい」ということです。そして、それはまた、「^{よみがえ}甦りなさい」「^{まこと}復活しなさい」という言葉にほかなりません。新しいいのちに甦りなさい。真のいのちに復活しなさい。私の与える そのいのちを受けて、新たな人生にあずかりなさい、と イエス・キリストはそう言っておられるのです。それは男の惰性を破るものであり、それなりへの安住と本音の取り繕いを変えさせるものでもありました。そして、続けられます。「床を担いで歩きなさい」。男の床は^{とこ}藁で出来た軽いものでした。ですから、担いで歩きなさい、と 主イエスは言われたのです。しかし 実のところ、男はわざわざ^{とこ}床を担いで池を去る必要もありませんでした。そこに置いたまま立ち去ってもよかったです。誰かがまた、それを使うことができたはずです。けれども、主イエスはあえて、^{とこ}床を担いで歩け、とおっしゃられた。それを担いで運び歩け、と言われたのでした。それはいったい、どういうことなのでしょう？ それはつま

りは、神の慈しみによって救われたその事実を 男が忘れることなく、それを携えて生きようように求められたということではないか。生活の中でそうすること、みんなの中でそうすることを期待されたということではないでしょうか。床を担いでそのように生きることは 実は、直後の9節b以下ですぐにも起こるように、ユダヤ人たちに問い詰められる事態を招くことにもなるのですが、しかしなお、池の畔^{ほとり}での恨みと愚痴と投げやりの人生に 男が二度と戻ることのないよう、主イエスは彼にそうするように求められたのだと思います。そして、こう願われたのではないのでしょうか。この先、救いのそのしるしを担いで生きなさい。救いのしるしである その寝床を、後ろ向きの元の床^{とこ}に戻してはならない、と。これからは、病の床が男を乗せるのではなく、意味ある人生という床を 男が逆に運んで生きるからです。虚しい^{むな}ことに引きずられないように。落胆に心を死なせないように。起きて、床^{とこ}を担いで歩き出さなさい。私の与えるいのちの内に、私と一緒に歩きなさい。豊かな歩みがそこにあるのだから、と イエス・キリストは男にそう語りかけ、私たちにもまた、そう語りかけてくださっているのではないのでしょうか。

ベトザタの池の男は投げやりと 諦^{あきら}めの中に閉じ籠もって、池の水が動くのを待つことから抜け出せませんでした。そして、不平と不満のうちに、そこに留^{とど}まり続けていました。男のこの姿を目にし、ルターと共に有名なカルヴァンという宗教改革の大先輩はかつて、次のように述べました。「この病の男の内に、私たちはおよそ、自分自身の姿を見る。私たちは神の助けの大きいなることを忘れ、自^{みづか}らの小さな思いの内に閉じ籠もってしまうからだ。そして、自分の心にある以上のことを信じていくことができなくなってしまう」。私たちは実際、それぞれにいろんな経験をして、今ここに至っている。そこには、決して良いことばかりではない、悲しかったことも辛^{つら}かったことも、悔やんでならないことも心の痛むこともあったのではないのでしょうか。けれども、私たちは だからといって、自分を小さく貧しい思いの内に閉じ込めないようにしたいと思います。なぜなら、イエス・キリストが私たちの前に立ってくださっているからです。今いるところから 一歩 前へ、もっと前へと導くために。今ある自分から、もっと豊かな自分へと歩ませるために。そして、私たちを引き上げ、救い、甦^{よみがえ}らせ、復活させるために。私たちは、たとえ自分に自信が持てなくとも、主イエスの慈しみと顧みとがそこにあるのですから、安心して踏み出せばいい。主イエスの愛の御手^{みて}が先立ってそこにあるのですから、心配せずにそうすればいい。その中を凜^{りん}として歩めばいい、と そう思わされています。

それはまさに、私たちの決意や頑張りを超えた恵みの出来事なのではないのでしょうか。そこに信頼を置くこと、それが聖書の言う信仰というものではないか。確か^{たしか}の望みは私たち自身の力こぶにではなく、それを凌^{しの}いである そのところにこそあるということ。それが、物語の向こう側から、またその底流として、今日の聖書が私たちに語りかけるメッセージの中心なのではないか、と そのように教えられています。

男のあやふやさをもものともせず、御自身の熱い思いを貫かれるイエス・キリスト。それは、この私

たちに向けられた主イエスのお姿でもあるにちがいありません。そして、それはそのまま真つすぐ、あの十字架へと繋がってゆく。私たちに向けられた 主イエスのそんな熱さを、私は無にしたくない、無にはできない。心して、大切にしたいと思っています。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたは、人の世から忘れられ、置き去りにされている人々のもとに足を向けられます。見過ごしにされているところに示される あなたのその愛を心から感謝いたします。

御子イエス・キリストの十字架において示された あなたの慈しみを、誰よりもそれを必要とし、誰よりもそれを求めている人々の上にもずもって 豊かに注いでください。そして、求める者すべてを御子の復活の光の内に包み入れ、豊かないのちで満たしてくださいますように。私たちの求める思いを 常に、心からのものとさせてください。

願わくは、今この時もなお 痛みや寂しさ、悲しみに 蹲^{うずくま}っておられる方々のもとに どうか、あなたが慈しみの足を向けてくださいますように。

主の御名^{みな}によって願い、お祈りいたします。

アーメン